

川崎病のサーベイランスとその解析に関する研究 平成8年度総括研究報告書

分担研究者 原田研介

要約：川崎病のサーベイランスとその解析に関する研究として、以下の研究を行った。①川崎病の発生状況の全国調査の解析、②川崎病急性期治療のガンマグロブリンの投与方法、投与量の検討、③ガンマグロブリン無効例の調査とその治療法の検討、④川崎病不全型の臨床像とその予後の調査。本年度はこの研究班の2年目である。これらの研究の結果と個別研究について報告した。

見出し語：川崎病、サーベイランス、ガンマグロブリン療法、不全型川崎病

研究組織：

- ・分担研究者：原田 研介（日本大学小児科）
- ・研究協力者：

柳川 洋（自治医大公衆衛生）

大川 澄男（日赤医療センター小児科）

尾内善四郎（京都府立医大小児疾患研究施設内科）

古庄 巻史（京都大学小児科）

加藤 裕久（久留米大学小児科）

馬場 國蔵（西神戸医療センター小児科）

浅井 利夫（東京女子医大第二病院小児科）

古川 漸（山口大学小児科）

- ・顧問：川崎 富作（日本川崎病研究センター）

1. 全国調査の解析

1991から1994年までを対象として実施した第12回および第13回全国調査成績から、巨大冠動脈瘤を認めた例の特徴を把握し、巨大冠動脈瘤発生の危険因子の検討を行った。巨大冠動脈瘤

を持つと報告された患者と同一病院から、性・年齢をマッチさせて選んだ対象について臨床症状検査所見などを検討した。患者・対象69組を検討した。結果は次のようであった。

入院時カリウム(巨大瘤群で低値)、血小板最低値(巨大瘤群で低値)、血小板最高値(巨大瘤群で高値)、アルブミン最低値(巨大瘤群で低値)、CRP最高値(巨大瘤群で高値)の5項目で有意差が観察された。原田のスコアは、巨大瘤群で対象群に比較して高い方へ偏っていた。

これらの結果と過去に報告されているものを合わせて今後の巨大冠動脈瘤発生の予測に応用できると思われる。巨大冠動脈瘤は川崎病全体の約1%にみられる。巨大冠動脈瘤の発生を予測し、それを予防するための治療法の確立が必要である。

2. ガンマグロブリン投与方法、投与量の検討

研究班員及び班友の18施設での平成5・6年の2年間における川崎病確実例に対するガンマグロブリンの投与総量、投与適応の選択法について検討を行った。投与適応の決定は原田のスコア、岩佐のスコアにもとづくものがほとんどであった。投与方法は2g/kg 1回投与、400mg/1kg×3～5日、300mg/1kg×5日、200mg/kg×5日などさまざまであった。初期投与の総量が2.0～1.0g/kgのものが入院期間が短かった。

米国ではガンマグロブリンの一括投与が一般的である。一括投与方法の方が、分割投与方法より効果が高く、かつ入院期間も短い。本邦では健康保険で一括投与を認めていない。改善の必要がある。

3. ガンマグロブリン無効例の追加治療法

ガンマグロブリン追加療法の適応の判定の試みを行った。第13回全国調査の巨大瘤形成例66例を対象として、第12回全国調査で行った結果(前年度報告書)を再評価した。ガンマグロブリン投与直後の原田のスコアが陽性あるいは体温37.5℃以上が巨大冠動脈瘤の出現頻度が高く、ガンマグロブリンの追加投与が必要であると判断された。第12回全国調査例での結果と同様の結果が第13回全国調査例でも得られた。ガンマグロブリンの追加投与量についてはまだ確定的なものはない。分割投与よりも1回単独投与が良いと思われる。1g/kg、2g/kg どちらが良いかは今後の問題である。

4. 不全型の臨床像

班員、班友の18施設に川崎病の不全型例の調査を行い、確実例と比較し分析を行った。不全型と思われる81例が集積された。主要症状の数としては4症状61%、3症状31%、2症状8%であった。全体として、不全型では臨床的に軽症で、経過は短かったが、心炎が3例認められ、そのうち1例が死亡している。不全型であっても注意して、積極的な治療が求められる。

5. 個別研究

尾内らは、ガンマグロブリン投与前後のIgGの血清濃度を比較し、ガンマグロブリン投与方法の比較を検討した。その結果分割投与よりも一括投与の方が有意にIgGの上昇が認められ、臨床症状及び検査所見の改善が早かった。以上の結果から一括投与をすすめている。

大川らは、川崎病既往者の冠動脈危険因子であるLp(a)値の検討を行っている。川崎病既往児172例を対象としている。動脈硬化指数も検討した。川崎病既往児と、一般小児との間にLp(a)値の差はなかった。冠動脈障害の程度とも比例したかった。このような結果ではあったが、長期的な冠動脈疾患に対する追跡は必要であることは言うまでもない。

古庄らは、冠動脈病変の予後に関して、京都大学入院例を対象にして追跡結果を報告している。川崎病の長期経過後に狭窄を生ずる例があり、注意を促している。

浅井らは、心室遅延電位を測定し、長期予後との関係を検討している。標準12誘導心電図が正常であっても、心室遅延電位が異常である例があり、そのような例は心筋障害が残存していると結論している。小児における心室遅延電位の出現の意義と予後の関係を更に検討する必要があるだろう。

加藤らは、アセチルコリン、ニトロールを用いて、冠状動脈内皮の機能を検討した。アセチルコリン、ニトロール注入前後の冠動脈径を比較して、拡張率をみている。冠動脈病変が存在した部位での拡張能の低下がみられている。更なる検討が望まれる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:川崎病のサーベイランスとその解析に関する研究として、以下の研究を行った。(1)川崎病の発生状況の全国調査の解析、(2)川崎病急性期治療のガンマグロブリンの投与方法、投与量の検討、(3)ガンマグロブリン無効例の調査とその治療法の検討、(4)川崎病不全型の臨床像とその予後の調査。本年度はこの研究班の2年目である。これらの研究の結果と個別研究について報告した。